5001　島外出荷品目の生産性向上および新たな換金作物の導入と生産振興

対象集団　三宅島営農研究会（７）、三宅島パッションフルーツ生産部会（８）
三宅島地産地消部会（カンキツ生産者群）（８）、切葉・枝物生産者群（７）
三宅島アシタバ生産者部会（31）、認定農業者(22)

・三宅島営農研究会：農業経営技術の改善を図ることを目的とした生産者組織
・カンキツ生産者群：2021 年３月にカンキツ研究会を設立

地域の紹介

三宅島は、噴火活動により 2000～2005 年に島民が島外へ避難し、農地も降灰、泥流及び火山ガスによって壊滅的な被害を受けた。帰島後、農地等の復旧・整備が進められたが、火山ガスの影響で営農活動は制限されてきた。噴火前の主要作目であったレザーファン等は火山ガスに弱く、比較的耐性のあるパッションフルーツ、キキョウランやコルディリーネ等の切葉、ヒサカキ等の切枝およびアシタバ等が島の基幹作目として定着してきた。

現在、三宅島の販売農家数は 21 戸あり、特産のアシタバを中心にキキョウランやコルディリーネ等の切り葉類、ヒサカキ等の切り枝類を市場出荷している。また、サトイモ、キヌサヤエンドウ等の地場野菜は、共同直売所及び島内商店等で販売している。パッションフルーツについては、島内外の一般需要や観光客のお土産向けに販売しているほか、加工品の原料としても出荷している。

・農 家 戸 数：49 戸　　・販売農家：21 戸（2020 年農林業センサスより）
・産出額順位：①アシタバ、②コルディリーネ（ドラセナ）、③キキョウラン

コルディリーネ（ドラセナ）

キキョウラン

ヒサカキ

選定理由・目標

1　選定理由

三宅村の主要品目のうち、パッションフルーツについては安定生産と省力化に向けた栽培技術の向上、切葉類やヒサカキについては安定生産や栽培者の増加、アシタバについては収益性の向上や新規栽培者の確保が課題である。

また、三宅村から島外へ出荷できる換金作物が少ない。特に新型コロナウイルスの感染拡大に伴うイベント等の自粛により、これまで堅調であった花き・切葉の需要が大きく減少したこと等から、より安定した換金作物の導入が課題となってきた。そこで三宅

村役場はカンキツ類の振興を図っており、2021 年３月にはカンキツ研究会を村役場と普及指導センターで協力して立ち上げた。栽培技術の向上が課題となっている。

２　目　標

１　パッションフルーツの安定生産と労力軽減

・遮光技術導入（０→３戸）・垣根栽培導入（０→２戸）・生産量（4.3→4.8ｔ）

２　切葉・切枝類の安定生産と新たな品目の導入による多品目化

・ヒサカキ、コルディリーネ生産者数（３→５戸）・病害虫発生消長把握・防除暦策定

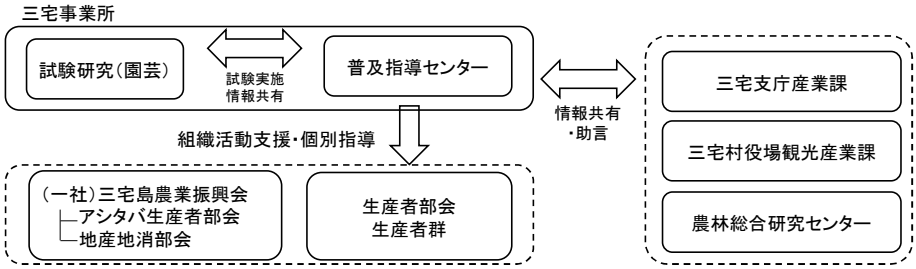
３　アシタバの収益性向上と生産者の確保

・灌水装置導入（３→６戸）・８月出荷量（１ｔを維持）・新規参入者（５戸）

４　カンキツ類の導入と生産振興

・導入生産者数（２→10 戸）・病害虫発生消長把握・防除暦策定・研究会（３回）

活動の体制



活動の概要

１　パッションフルーツの安定生産と労力軽減

（１）暑熱対策技術（遮光資材等）及び省力化技術（垣根栽培等）の導入

・暑熱対策技術…遮光資材による着色不良果軽減の展示ほ設置

・省力化技術…垣根栽培（通常の平棚から垣根仕立てに替えることで、作業負担を軽減する栽培法）に関する講習会

センサー類を利用したビニール資材の自動巻上げ装置の実証展示

遮光資材検討の展示

２　切葉・切枝類の安定生産と新たな品目の導入による多品目化

（１）病害虫の適期防除による安定生産とヒサカキ及びコルディリーネの導入

・主要な害虫の発生状況調査を実施（毎月２回）

・農林総合研究センター病害虫チームに協力依頼し、ハダニの薬剤抵抗性を調査

３　アシタバの収益性向上と生産者の確保

（１）灌水による単価の良い夏季における生産量維持

・灌水装置導入による収益性の向上について情報提供

・試験成果「アシタバ早期収益化マニュアル」を活用した新規参入者や希望者への指導

・アシタバ育苗時に用いる保温資材検討の展示ほを設置

保温資材検討の展示ほ

４　カンキツ類の導入と生産振興

（１）苗の導入支援と基本的な栽培技術指導の徹底

・三宅村が生産振興を奨励しているカンキツ類の生産振興のため、村の実証展示圃場において防風対策、病害虫防除等、栽培管理等を指導

・露地及び施設における主要な害虫の発生状況調査を実施（毎月２回）

・防風ユニットの展示ほを設置

（２）組織活動の活性化
・栽培品種の検討
・定植講習会の開催
・栽培講習会の開催（年３回）
・栽培管理の動画作成および公開

カンキツ防風ユニットの展示

成　果

１　パッションフルーツの安定生産と労力軽減
（１）暑熱対策技術（遮光技術等）及び省力化技術（垣根栽培等）の導入
・暑熱対策技術は１戸が導入し、８月中旬の着色不良果の発生割合が 71％から４％に減少した。２戸が次年度以降の導入を検討している。
・垣根栽培は、次年度２戸が導入予定。
・新規に３戸が栽培を開始し、１戸の生産者が規模を拡大したため生産量は計画策定時の 4.3ｔから、到達目標を上回る約５ｔまで増加した。

２　切葉・切枝類の安定生産と新たな品目の導入による多品目化
（１）病害虫の適期防除による安定生産とヒサカキ及びコルディリーネの導入
・コルディリーネのハダニ（図１）、ヒサカキのアブラムシ、エダシャクおよびハモグリバエの発生消長を２か年分把握した。また、生産者の栽培履歴を調査し、防除暦策定の参考とした。
・ヒサカキは、2020 年に１戸が新規就農して栽培を開始し、生産量が増加傾向である。
・生産者数は、コルディリーネとヒサカキが計４戸となった。

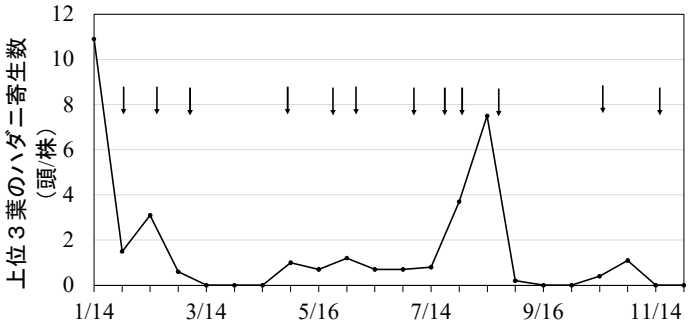


図１　2022 年のコルディリーネのハダニの発生消長
（矢印はハダニ類の防除を行った日を示す）
※2023 年はほとんど発生がみられなかったためデータ省略

３　アシタバの収益性向上と生産者の確保
（１）単価の良い夏季における灌水による生産量維持
・灌水装置の導入をすすめ、４戸が導入。
・２戸が新規にアシタバの栽培を開始。

４　カンキツ類の導入と生産振興
（１）苗の導入支援と基本的な栽培技術指導の徹底
・三宅村カンキツ実証展示圃場（1750 ㎡）では、2019 年に定植したレモン類が 2021 年度に初結果（約 20kg）し、2022 年度は約 175kg 収穫できた。今年度の収量は 350kg 程度と見込まれる。
・ミカンハモグリガとハダニの発生消長を２年分把握。
・年間の栽培管理表と防除暦を策定した。
（２）組織活動の活性化

2022 年のレモンの定植講習会（上）と 2023 年の様子（下）

カンキツ研究会および村役場とカンキツ類の振興方針を協議した結果、市場の需要が高いレモン３品種（ユーレカ、リスボン、ビラフランカ）を推進していくことが決定した。カンキツ研究会は三宅村の補助事業を活用してレモン苗木を計 330 本導入し、2022 年３月に７戸が定植した。定植する圃場は事前に確認を行い、栽培の可否や防風対策の必要性について指導した。また、定植直前に定植方法の講習会を開催した。その後は年に３回程度栽培管理に関する講習会を定期的に開催し、技術が向上した。また、カンキツ類の栽培管理の動画を８つ作成し、YouTube 上の島しょセンター公式チャンネルにアップロードした。

カンキツ実証展示圃場の 2021 年（左）と 2023 年（右）の状況

残された課題

1　パッションフルーツの安定生産と労力軽減

垣根栽培は作業負担を軽減して収量は増加するものの、作業時間は増加して果実重や糖度は減少するという試験研究の結果を参考にし、農家ごとの販売方法に留意しながら技術の普及を図る。

三宅村の農業長期研修を受けＲ４年にパッションフルーツで新規就農した農家は生産量を増やしてきているが、販路開拓が課題となっている。生産者への「販路開拓ナビゲーター」の紹介や「GAP 商談会」への参加について調整した。引き続き商談会等に誘導し、販売先の確保を支援する。

2　切葉・切枝類の安定生産と新たな品目の導入による多品目化

ヒサカキは挿し木をしてから収穫できるまでの期間が長いため、就農にあたっては長期的な視点に立った営農計画が必要である。

3　アシタバの収益性向上と生産者の確保

高齢化による生産者の減少により、夏季に限らず出荷量が毎年著しく減少している（Ｒ３年８月：840kg　Ｒ５年８月：693kg）。村役場や支庁と連携し、新規栽培者の掘り起こしが急務である。

4　カンキツ類の導入と生産振興

三宅村カンキツ実証展示圃場は農家への普及拠点となるため、今後も栽培指導を徹底し収量を確保していく。カンキツ研究会の会員圃場では来年度に初結果となる見込みである。成木の剪定などの管理について、今後も継続して指導が必要である。防除暦は、農家圃場で実際に防除を行った結果や年度による病害虫発生消長の違い等を考慮し、適宜改定する必要がある。今後生産量が増えることを見越し、島内飲食店や旅館等や、島外の加工仕向け等への出荷が行えるよう村役場と連携しながら販売先の確保を支援する必要がある。